

編集後記

「企業の寿命」30年説と長寿・老舗企業の極意

例年、この季節は、毎年恒例のビジネスプラン・コンテストやスタートアップ企業、スモールビジネスについて紹介してきたが、今回は、逆に古くから長く続く長寿企業について記したい。

「企業の寿命30年説」というよく知られた説がある。これは、1983年、『日経ビジネス』誌の特集記事「企業は永遠か」の中で初めて示されたもので、企業には寿命があり、繁栄のピークは、約30年程度であるというもの。但し、経営者の努力によって、企業の寿命を延ばすことも可能であり、また、業種によって差がある（例えば、製造業が最も長く、次いで卸売業、運輸業。金融・保険業は短い）ことも指摘されている。

中小企業白書によれば、起業した後の生存率は、10年後には7割弱、20年後には5割弱となり、その割合は近年、減少している。

2023年に倒産した企業の平均寿命について、興味深いデータがある。東京商工リサーチの調査では、その平均寿命は23.1年で、2007年の調査開始以来、東日本大震災が発生した2011年の23.0年に次いで短い。その背景として、ゼロ金利融資の返済開始や物価の高騰、人件費の上昇、人手不足等が考えられ、それらが複合的に作用し、特に経営基盤の脆弱な業歴の浅い企業にとっては、コロナ禍の影響も推測される。

これらのデータは、企業の長期的な存続が容易でないことを示している。特に新興企業や中小企業は、経営環境の変化に柔軟に対応し、強固な経営基盤を築くことが極めて重要といえる。

一般的に日本の企業は、目先の利益よりも長期的な存続を求める傾向が強いといわれる。そのため、足元の利益率は、欧米と比べて低いが、企業の寿命をみると、長寿企業の数、欧米より日本が多く、「創業100年を超える長寿企業」が、全国に2万社以上あるといわれ、世界的にも傑出している。30年弱で絶えてしまう企業もあれば、成長を続ける企業もある。その違いはどこにあるのか。

「長寿企業の存続メカニズム」について研究されている静岡文化芸術大学 曾根教授のお話を聞く機会があった。日本に長期存続企業が多い理由として、曾根教授は、「長子存続に固執せず、血縁を越えた優れた後継者選び／保守的な企業運用／模倣できない技術で価値を提供／外国からの侵略が少なかった／職人精神の誇りとそれを尊重する社会的雰囲気」をあげる。教授は、具体的な調査対象として、578年（！）創業の金剛組（※2006年に高松建設に株式譲渡）、1610年創業の竹中工務店等の宮大工企業を選び、そのビジネスシステムを分析した。

内容を簡略に記すと、「創業者の『遺言書や家訓』を保持することは大切であるが、時代に合わせて家訓を生かすこと／技能伝承の仕組みにおいて、独自技術の外部流出を防ぐシステムをつくることともに、組織内で組をつくり、組同士が切磋琢磨し、競いながら、技術を伝承する制度づくり／顧客の維持と新規開拓」等々。即ち、「環境の変化に敏感で、強い結束力があり、模倣困難な価値をもち、土着の産業として定着。資金調達に関しては保守的で、質素倹約を旨とする。技術を向上させながら、伝承する」こと、更に付け加えれば、「危険が生じた時に拡大させず、最小限にとどめる経営危機を回避する仕組み」が求められるという。

和歌山県でも古来より、高野・熊野を訪れる旅人をもてなした旅館や、豊かな自然風土の中で受け継がれてきた伝統的な食品や清酒、工芸品や日用品製造等、様々な分野の長寿企業が今も多く存続している。

県は、2007年より、時代の荒波を乗り越え、100年以上にわたって、伝統の技術や事業を守り、継承することによって、本県の経済発展に貢献し、かつ他の企業の模範となってきた長寿企業を「和歌山県100年企業」として表彰制度を設け、2022年の第6回までに計169社が表彰されている。

直近の第6回表彰では、受賞した22社を代表して、1714年創業という歴史をもつ田辺市の株式会社切目屋薬局の脇村明氏が「…江戸時代末期から現代まで、存続が危なくなかったことは4、5回ありましたが、お客様のための誠意を尽くし、お客様の支援を受けられたから乗り越えられた。今後もさらに精進を重ね、地域に貢献するモデルに…」と挨拶した。

また、和歌山県経営者協会は、2021年に「和経協百年企業の会」（名誉顧問：ヤマサ醤油株式会社（1645年創業）濱口道雄氏、顧問：中野BC株式会社 中野幸生氏）を発足、毎年、総会を開催し、創業百年に達した企業を新会員として紹介するとともに、相互の連携と親睦を図っている。

設立総会で、名誉顧問の濱口道雄氏は、「…なぜ長く続くのかと聞かれるが、その普遍的な答えはなく、続けてきた理由はそれぞれだが、共通する点もある。それは老舗の精神、さらに続けていくための使命感ではないかと思う」と語った。因みに、この和経協の会で最も創業が古いのは株式会社総本家駿河屋で1461年、室町時代である。また、2024年度、めでたく創業百年を迎え、会員となったのは、尾高ゴム工業株式会社、久保田工業株式会社、株式会社リカーショップ ゴワの3社で、会員数は、計40社となった。

県の「和歌山県100年企業」には、1604年創業の白浜町の湯崎館、1639年創業の田辺市龍神村の上御殿、同年の下御殿、1650年の川湯観光・富士屋、1781年（以前）のみなべ町の朝日楼等、由緒ある旅館も多く記載されている。

中でも、白浜の湯崎館は、その地の庄屋であった森三太夫が、紀州浅野家の湯守として着任し、日本書紀にも「牟婁の湯」と記された湯崎に於いて、紀州藩から入湯許可の覚書を受け、宿泊施設の経営と地域の共同浴場を管理するようになったのが始まりとされ、白浜温泉街の中心に位置する、最古の老舗旅館である。しかし、湯崎館は、2014年に休館、建て替えを目指すも、2016年閉館。その後、取り壊され、現在はコンビニエンスストアに姿を変えた。維持、存続がいかに大変かを象徴するが、やはり残念なことである。

(谷 奈々)

21^{世紀} Wakayama Institute for
Social and Economic Development
WAKAYAMA

VOL.
109

発行 2025年4月9日

編集発行者 一般財団法人 和歌山社会経済研究所
〒640-8033
和歌山市本町2丁目1 フォルテワジマ6階
TEL 073-432-1444(代) FAX 073-424-5350
<http://www.wsk.or.jp/>

印刷 株式会社 さかぐち昇和印刷

無断転載・複写を禁ずる